

広島大学 高等教育研究開発センター 大学論集
第42集 (2010年度) 2011年3月発行：265-278

ジョン・ヘンリ・ニューマンの『大学論』

吉 永 契 一 郎

ジョン・ヘンリ・ニューマンの『大学論』

吉永 契一郎*

1. はじめに

ジョン・ヘンリ・ニューマン（1801年–1890年）の『大学論 *The Idea of a University*』（1873）は大学論の古典として知られ、欧米において大学教育の理想が語られる際に参照されることが多い。シェルドン・ロスブラットは、『大学論』を、英語において、この分野における最も重要な書物であるとし（Rothblatt, 1996, p.7）、自らの著作に対して、「イギリスとアメリカにおけるニューマンの遺産の運命」という副題を与えているほどである。ニューマンについては、その生涯の前半をイギリス国教会の司祭としてオックスフォード大学に過ごし、伝統的な信仰の復興を目指したオックスフォード運動に参加した後、生涯の後半をカトリックの司祭としてバーミンガムで過ごしたことが知られている。

ニューマンの『大学論』は1852年から1858年にかけて発表されたもので、その背景には、当時、彼がアイルランドに設立されようとしていたカトリック大学の総長に任命されたことがある。そのため、読者にカトリック教徒を想定している記述も見られる。ニューマンの『大学論』は、バークやコールリッジの議論を受け継ぎ、教育論としては伝統主義・本質主義に分類されるものであって、ロックやJ・S・ミルの功利主義や機能主義とは一線を画すものである。そのため、ニューマンの議論については、大学が大衆化した今日では通用しないという意見（Roberts, 1990, p.198）がある一方、大学のあり方を問い直すために有用であるとする意見（猪木, 2009）がある。

『大学論』におけるニューマンの議論を整理すると、(1) 大学は研究機関ではなく教育機関である。大学における教育は専門教育でも職業教育でもなく、古典中心のリベラルアーツであり、異分野を統合する能力の育成である。それは、(2) 大学教育の目的が、視野の拡大・精神の修養・思考力の訓練・社交性の開発を含む「紳士」の育成だからである。ただし、(2) はクリスチャンの育成を念頭に置くもので、知的な洗練さや社交性と誤解されるべきではない。そこで、(3) 大学には道徳や価値観を問う神学が必要である。それは、科学的な思考と宗教的な思考とが本来異なるものであり、限定された範囲で成果を生み出す前者には、統一的なものの見方や学問研究と人格形成をつなぐ契機が欠けているからである。

日本においても欧米においても、ニューマンの『大学論』が論じられる際には、(1) と (2) が取り上げられることが多い。ここでは、「詩人」としての直観に優れたニューマンの洞察力が賞賛される¹⁾。しかしながら、ニューマンの宗教的背景を考えるならば、『大学論』の主題は(3) であるは

*東京農工大学大学教育センター准教授

ずである。

そこで、本稿では、大学の役割に対するニューマンの基本的な認識、ヨーロッパにおけるリベラルアーツの伝統とニューマンのリベラルアーツ論との関係、ニューマンに見られるイギリスにおける紳士の伝統、そして、特に、大学における神学の役割についてのニューマンの見解を論じる。その際、リベラルアーツの概念は歴史的に大きく変遷しており、現在のリベラルアーツ論は近代主義の産物であって、中世のものとは異なるというブルース・A・キンボールの議論 (Kimball, 1995)、そして、ニューマン以降の大学における神学を理解するために、今日、アメリカの大学においては、行過ぎた価値中立の原則や実証主義が宗教的議論や理想を排除し、相対主義や物質主義を放置しているというジョージ・M・マースデン (Marsden, 1995) の議論を参照する。特に、今日の合理主義や個人主義の立場からは理解が困難になったニューマンの宗教観を理解するために、カトリック教徒の立場から、カトリシズムは「無前提性」から出発するという吉満義彦の議論 (吉満, 1933) を参照する。本稿は、ニューマンの議論が、中世における大学教育の伝統に沿ったものであり、彼の宗教的関心が、洋の東西を問わず、大学教育に対して普遍的意義を持つことを示すものである。

2. 教育機関としての大学

ニューマンは、オックスフォード時代から優れた説教者であり、アフォリズムの名手として知られている。「生涯が終わることを恐れるな。むしろ、始まらないことを恐れよ。」「成長が生きていることの唯一の証である。」「議論によって説得することは、拷問によって説得することに等しい。」「今、持っているものから始めよ。すべてが揃っていることなどないのだから。」これらの名言は、彼の数多くのアフォリズムの一端である。作家のミュリエル・スパークは、ニューマンの説教の魅力は「簡潔さ」と「文体」にあるとしており (Newman, 1964, p.ix), 『大学論』においても、その魅力は如何なく発揮されている。

『大学論』の序文において、ニューマンは、大学の目的が教育であることを明言している。そして、「教会が大学を創ったのは、才能のある人間や天才、知識そのものを賞賛するためではなく、……子弟を、知的で有能であり活発な社会の一員とするためである (序文)」と、大学の歴史的意義を振り返った後、「もし、大学の目的が自然科学や哲学の研究であれば、なぜ学生を必要とするのか理解できない。もし、その目的が宗教訓練であるならば、なぜ文学や科学を教えるのか理解できない (序文)」として、研究所や神学校と大学の役割を区別する。そして、当時、注目されつつあった大学における研究活動に対して、「古来、真理の探究は、世間から逃避して、静かな場所でなされてきたことは承知の事実である。偉大な研究者たちは、集中力を発揮するために中断を嫌う。そのため、彼らは常に『上の空』で、奇妙な性癖の持ち主であり、講義や学校を避けるのである (序文)」と警告を発する。

ニューマンによれば、「天才に技術はいらず、英雄に訓練は必要ない。……大学は、アリストテレスやニュートンやナポレオンやワシントンやラファエロやシェイクスピアを生み出す場所ではない (第7講第10節, 以下, 7: 10と記す)。」つまり、「大学における教育は確かに偉大ではあるが実は

平凡な目的に達するための至って平凡な手段 (7: 10)」であり、「大学が生み出すべき人材は、特定分野の専門家でも天才でも英雄でもなく、社会性・調整能力を備えた社会の構成員なのである (7: 10)。」そして、大学は、あくまで「社会の知的な風潮を高揚させ、公共心を涵養し、国民の品性を純化し、人々の熱意に真の原理を与える (7: 10)」ことを目指すべきであるとする。ここでは、天才を偶像視せず、研究活動が大学の使命の一部であって、すべてではないというバランス感覚が発揮されている。

ニューマンが『大学論』を著すに当たって念頭に置いたのは、1809年から「エジンバラ・レビュー」において展開された古典教育批判、1810年のベルリン大学の設立、1836年のロンドン大学の設立、1848年より開始されたケンブリッジ大学における自然科学の学位試験である。当時、ベルリン大学は「フンボルト理念」に基づく研究至上主義を浸透させつつあり、ロンドン大学は職業教育を含む多様な開講科目、講義を中心とした教育、通学の許可、授業料による大学運営、試験による学位の認定などを展開しつつあった。

これらの大学に対して、ニューマンは大学の教育機関としての役割を強調し、専門教育と古典カリキュラムを区別する。それは、研究至上主義が教員の特定分野への集中を要求し視野を狭くするからであり、同じ教育であっても、職業教育は学生が特定のスキルへ隷属することをもたらすからである (5: 4)。

では、古典カリキュラムの教育的効果とはどのようなものであろうか。ヴィヴィアン・H・H・グリーンによれば、19世紀初頭にオックスフォード大学で教えられていたのは文法・修辞学・論理学・道徳哲学・数学および自然学であり、学位試験においては、ギリシア・ローマ史・詩・道徳・政治学の知識であるとされる (H・H・グリーン, 1994, 251-252頁)。そこで目標とされていることは、数学と自然科学を別にして、それぞれが別個の教育であるというよりは、ギリシア・ラテンの古典語の修得を通じた、包括的な言語能力の獲得や克己心の育成である。そこにおいて、知識は習得されるべきものであり、発見されるべきものではない。ニューマンは教員についても、「研究することと教えることは異なる営み・才能であり、同一人物が兼ね備えていることは稀である。既存の知識を学生に授けることに時間を費やす人間に新たな知識を生み出す余裕はない (7: 7)」という考え方であった。

3. リベラルアーツ

ニューマンの古典カリキュラムに対する見解をさらに理解するためには、彼のリベラルアーツ (Liberal Education) 論を検討する必要がある。ニューマンによれば、リベラルアーツの中心は「哲学 (Liberal Knowledge)」であり、機械的な職業教育と区別され、思考力を育成する (5: 6)。リベラルアーツの本質は、まず、「異分野間の相違が理解できる能力 (6: 5)」であり、次に、「諸概念を比較して体系化することができる能力 (6: 5)」である。リベラルアーツの特徴は統合する能力にあり、この点が分析力を開発する「科学」とは異なる。すなわち、近代科学が「部分」を志向するのに対して、リベラルアーツは「全体」を志向する (5: 序文)。現代の用語を用いるならば、リベラ

ルアーツが育成するのは「ジェネラリスト」であり、「スペシャリスト」ではないということになるろう。

そのため、ニューマンは、人間性の涵養や道徳意識の高揚を欠いた知識や技能の習得が大学教育としては不完全であるとする(7:10)。学生の人格形成を支援するのは、カレッジやチュートリアルに代表される学びの共同体である。彼によれば、教育には二つの種類があり、一つは自学自習によって身に付く能力であり、もう一つは他者との絆によって身に付く能力である(6:9)。そして、後者を可能にするのは、学生と教員間の共感や交流であり、そのような風土がないところでは、知性の開発もない。これが、「もし、カレッジやチュートリアルなしにさまざまな教科について試験に通れば学位を与える大学と、教員も試験もなく学生を3年から4年間一緒に生活させるだけの大学があったとしたら、……私は、後者を支持する(6:9)」という極論をニューマンが展開する理由である。ロスブラットによれば、教養の修得は、ドイツにおいては、あくまで個人の努力によるものであるのに対して、イギリス、そして、その伝統を受け継いだアメリカにおいては、大学が組織的に取り組む課題であるとされる(Rothblatt, 1997, pp.25-26)。

ニューマンのような議論は、19世紀前半のオックスフォード大学において代表的なものであった。ニューマン同様、「エジンバラ・レビュー」における古典教育批判に対しては、オックスフォード大学オリエール・カレッジのジョン・ディビッドソンやエドワード・コップルストンらが、積極的な反論を行っている。ディビッドソンは、リベラルアーツの統合力に関して、「歴史は物事があるがままに見せてしまう。すなわち、人々の道徳や財産が、激情や愚かさや野望といったあらゆる欠陥によって損なわれ、悪用されるというそのままの姿が示されてしまう。また、哲学は全体像を見えなくしてしまい、詩は全体像を余りにも飾り立ててしまう。これら三つを重ねた光こそ、それぞれの光が有する固有の偏った色彩を是正し、真理を我々に示してくれる。真理について熟考する正しい方法は、これら学問を三つ一緒に学ぶところから生まれる(神谷, 2006, 77-78頁)」と述べ、複眼的な視野によって、真理を見出すことの意義を説いている。

また、コップルストンは、特定の専門への集中がもたらす害について、「各個人の諸能力が一つの業務に集中すればするほど、各個人の業務の遂行は非常に熟練し効率的なものとなる。しかし、このように国の富の蓄積に効果的に貢献すればするほど、各個人は理性的存在としてはより一層劣った者となってゆく。各個人の活動範囲が狭まるにつれその知的な能力と習性も萎縮し、各個人はある種の強力な機械の附属部品に似て、その場所では役立つものの、他の場所では重要でもなく値打ちもない(神谷, 2006, 82頁)」と述べ、「知性をこのように一点に集中させることによって学問それ自体にはその世界における進歩をもたらす。それにもかかわらず、その学問に閉じ込められている個人は衰えてゆくばかりである(7:7)」という研究者の生態に対する危惧を表明している。

コップルストンによれば、高度な専門性がもたらす害は、個人の生活にとどまらない。社会的にも、「特定の目的に隷属していない人間関係が確立されていないと、取るに足らない個人的な見解や私情に拘泥したり、関心を持たないすべての事柄の重要性を過小評価したり、生半可な考え方をそれが当てはまらない場合にまで持ち込もうとしたりする(7:7)」ことが多くなり、社会を分裂させる。そこで、「意見が合わない各党派や組織の各部分の一つにまとめる絆、共通の話題を提供し、

程度の差はあってもすべての職業に染みついている狭量な偏見とは無縁な共感というものを呼び起こす絆(7:7)」を育成する必要が語られる。カップルストンがそのような効用があるとするのは文学である。

古典的なカリキュラムの擁護という点において、ニューマンの主張は、大西洋を越えて、1828年に発表された「イエール・レポート」と重なる部分が多い。しかしながら、後者は、カレッジ教育を職業的なものとするに反対する立場から書かれているために、その後続く専門教育・職業教育の「基礎」とする側面が強い。すなわち、後に、B. S. ブルームが開発した「タクソノミー」概念を用いるならば、知識・技能等の「認知的領域」を「イエール・レポート」が重視しているのに対して、ニューマンは、直感的に、より上位概念である態度・関心等の「情意的領域」の開発に関心を払っていることになる。ただし、「イエール・レポート」は、同時に、ニューマンには職業生活や高等教育の「グランド・デザイン」に対する関心が薄いことも明らかにしている。

ニューマンのリベラルアーツ観は、決して彼の独創ではない。むしろ、中世において支配的であったリベラルアーツ論の復古的な色彩が強い(吉満, 1933, 422頁)。この点を明らかにするのは、キンボールによるリベラルアーツの歴史である。キンボールによれば、ヨーロッパにおけるリベラルアーツの系譜には、「雄弁家」と「哲学者」の二つの伝統がある。そして、近代以前に、ロール・モデルとして、あるいはカリキュラム上、影響力を持ったのは圧倒的に「雄弁家」であり、テキストとして用いられたのはプラトンではなく、キケロやイソクラテスであった。

中世の初期に確立されたリベラルアーツは、カロリング・ルネサンスの産物であり、貴族の子弟たちが、聖職者や官吏として活躍できるよう、教会附属の学校で教育したことに端を発する。その目標とすることは、(1)リーダーの育成、(2)徳育主義、(3)教育重視、(4)人格形成、(5)古典主義、(6)教条主義、(7)教育のための教育であり(Kimball, 1995, pp.53-55)、ほぼ、ニューマンの理想と重なる。そして、ルネサンスと宗教改革を経て、17世紀以降に勃興したのは、ロック・デカルト・ホブズ・ヒューム・カントらの「哲学者」が説くリベラルアーツであり、その目標は、(1)批判精神、(2)制約のない探求、(3)実証主義、(4)寛容、(5)平等主義、(6)個人主義、(7)真理のための探究である(Kimball, 1995, pp.119-122)。キンボールは、それを旧来のリベラルアーツと区別して、「リベラルフリー」という言葉で表現して、ここでは、教育活動から研究活動、徳育主義から理性主義、道徳主義から価値自由の原則、古典主義から懐疑主義、権威への従属から個人の自立への移行が起こっているとする。

ただし、ニューマンの主張は、ヨーロッパ中世のリベラルアーツ観によって、すべて説明できるものでもない。次に述べるように、ニューマンの理想には、イギリス人として、16世紀以降に登場したイギリスにおける「紳士」の伝統が色濃く反映されており、特に、彼が強調する統合力や人格的影響力については、イギリスにおける「紳士」の伝統を抜きに語ることはできない。

4. 「紳士」の伝統

キンボールによれば、イギリスにおける紳士の理想とは、騎士の理想とルネサンス期の人文主義、

そして、キリスト教倫理が結合したものであるとされる (Kimball, 1995, pp.108-110)。そこで、強調されたのは、血統に替わって、儀式・教育・道徳を修得するという能力主義である。イギリスにおいて、最も影響があったトーマス・エリオットの『為政者論』(1531)は、カスティリオーネの宮廷論とエラスムスの教育論を結合させたもので、ギリシア語・ラテン語による文法・修辞法・論理学に加えて、地学・法律・詩学・歴史学・道徳哲学の学習と体育を推奨したものであり、その後のイギリスの大学におけるカリキュラムの原型となった。この当時であっても、専門教育に対する要求との対立はあったが、最終的には、リベラルアーツが紳士の証とされるようになったのである。

ニューマンは、紳士に対して「他人に苦痛を与えない人間 (8: 10)」という有名な定義を与えている。そして、紳士の特徴として、「教養ある知性、洗練された趣味、誠実で公正で私心のない精神、高潔で礼儀正しい態度 (5: 9)」を列挙している。彼は、紳士の育成が、知性の開発のみによって可能になるものではなく、社会性や身の振る舞い方を含むものであるとする。すなわち、大学における教育とは知識の伝達や開拓に留まることなく、文化や精神の継承でもある。彼によれば、紳士とは、「どのような集団の中にもくつろいでいることができ、すべての階層の人々と共通の立場に立つことができ、語るべき時と黙すべき時を心得ている。会話することも傾聴することもできる。要領を得た質問ができ、自らは教えるものがないときにも、時宜にかなった教訓を学び取ることができる。常に心を開いているが決して人のじゃまにはならない。気持ちのよい仲間であり、頼りになる友人である。真剣でなければならぬ時と遊んで過ごす時とをわきまえている。遊ぶときには品位をもち、真剣なときには力強さをもって振るまうことのできる的確な才がある。世間に生きてはいるが自己の内に生きる精神を持ち、外に出ては行けなくとも幸せの豊かな源泉が自らの中にあるので心は安らいでいる。公の生活で役に立ち引退後も支えとなる才能があり、その才能なしでは大いなる富も凡俗に過ぎず、それがあれば失敗や失望さえも魅力的な (長倉, 2005, 150頁)」人間のことなのである。

しかしながら、ニューマンは、紳士の理想でさえも、大学教育のすべてであるとは考えない。それは、「『紳士』は文明の成果であり、キリスト教の成果ではない (8: 10)」という言葉に示されている。そこには、「学問と徳義は別のものである。良識は良心ではなく、知的な洗練さは謙虚さでも信仰の拡張でもない。哲学はどれほど啓発的であって深淵であっても、情緒や動機や活力を生み出すことはない (5: 9)」という認識がある。彼によれば、「リベラルアーツは紳士を育成することはできても、クリスチャンを育成することはできない。なるほど、紳士の特性は賞賛すべきものであり、大学教育の目的とすべきものではあるが、神聖さや良心を保証するものではない (5: 9)。」ここにおいては、リベラルアーツや哲学さえもが相対化され、大学教育の核心ではないとされる。そして、ニューマンにとっては、世俗性の超越、すなわち、神学が課題となるのである。

5. 大学における神学

『大学論』の最初の三章は大学における神学の必要性を論じたものである。ただし、ニューマンは、ここで、学生が神学部へ進学する以前のカレッジにおける神学を論じており、神学教育自体や宗教

的な教義を扱うものではない。むしろ、今日的に言えば、大学における教育理念と呼ぶべきものを議論している。

まず、ニューマンは、大学から宗教色を排除しようという議論を批判する。これは、科学的思考の浸透に伴い、教育論においても顕著になった「価値自由の原則」や結果のみを問題にする実証主義の立場に向けられている。ニューマンは「宗教的法則は、ニュートンの法則が学問であるのと同様に学問である (2: 9)」とする。そして、形而上学的な議論を排除する意見に対して、そもそも、何の前提も持たない中立的な立場などは存在しないと述べる。「例えば、ニュートン力学は単なる思い付きや仮定でなければ、昨日の出来事が明日も起きるといふこと、物質は存在すること、人間の感覚は信頼するに足るなどという形而上学的前提を必要とする (3: 3)。」

大学教育においても、価値や道徳観をめぐる前提が必要であり、それが神学である。仮に、神学を否定したとしても、形而上学自体の消滅にはつながらない。「およそ、ある学問を否定すると、その場所を空白にしておくことはできない。別の学問が進入するだけである。すなわち、何の根拠もなく、別の学問が領海侵犯を行うようになるのである (4: 2)」として、道徳や宗教に替わって、物質主義や還元主義などが教育理念となる危険性を指摘する。

次に、ニューマンは、神学と科学との違いを論じる。科学が「部分」を志向するのに対して、リベラルアーツや哲学と同様、「神学」は全体を志向する。「宇宙は一つであり、その内部は、縦にも横にも緊密につながっている。その宇宙を部分や機能に分けることは、単なる抽象論にしか過ぎない (3: 4)。」そして、人間の意思や神性の排除は、統合した認識を不可能にし、知識をばらばらにしまう (3: 6)。学問が「全体性」を保証されるのは、「どれほど学問が分化しているように見えようとも、それが人間から生まれたものであり、道徳的理性の影響下にある (7: 9)」という確信である。すなわち、「宗教的真理は、学問の単なる一部分であることを超えて、学問自体の前提 (3: 10)」でもあるのである。

それは、神学と自然科学との方法論の違いでもある。ニューマンによれば、「神学の方法は幾何学のような厳密科学であり、演繹法に基づく。それに対して、物理学の方法は、まず、実験から始まるのであり、帰納法に基づく (7: 6)。」「物理学においては、さまざまに多量な情報がばらばらに与えられ、整理と分析を必要とする。神学では、そのようなことは無用であり、啓示が与えられているのみである。……使徒の時代から、この世の終わりに至るまで、神学的知識に新たな真理が加わることはない (7: 6)。」

さらに、ニューマンの批判は、近代における懐疑主義・個人主義と一体となったプロテスタンティズムにも及ぶ。彼によれば、制度としての教会を否定し、聖書と個人の信仰を強調するプロテスタンティズムにおいては、「宗教が理性ではなく、感情や嗜好に基づいている。そして、教義さえも、客観性を欠いた主観である (4: 4)」という事態が起きている。これは、信仰における個人主義がもたらす当然の帰結である。しかしながら、キリスト教本来の教えは、人間が「自らの努力によっては、『天国』に至ることができないこと、自らは道徳的確信を持つことができないこと、人間の感覚は根源的に邪悪である (13: 2)」という認識にあり、個人の努力や業績によるものではない。

すなわち、ニューマンは、探究心や個人の自由、合理的思考の強調がむしろ、各自を狭い領域に

閉じ込め、偏見や恣意的な判断を蔓延させているとする。したがって、大学人が、確固とした道徳的基盤を確立し、余裕を持って多様な意見に対応することができるためには、その前提となる神学が必要となるのである。それがあってこそ、「恐怖や偏見なしに、あらゆる真理を受け入れることが可能であり、既存の知識を修正したり、異質な態度を認めたりすることによって、独創的な見解を十分評価する（8:2）」という学問的な態度を維持することもできるのである。この点において、キリスト教の教義は、知的な活動に対して制約を与えるものではなく、むしろ、その自由な探求を徹底するもの（8:6）であるとされる。

大学における神学、あるいは統合理念の問題について、今日の状況を論じているのは、*The Soul of the American University* (1994) の著者であるマースデンである。彼によれば、今日のアメリカの大学は、ニューマンの時代以上に宗教的な言説を嫌悪しており、結果として、物質主義や相対主義を助長している（Marsden, 1996, p.317）。マースデンによれば、この現象は、過去にキリスト教が高等教育界に占めていた独占的な地位に対する反省や現在の多文化主義的背景を考えれば、理解ができる部分もある。しかしながら、フェミニズムやマルキシズムが堂々と語られる一方、キリスト教について語るができないというのはおかしな話である。ニューマンが述べるように、人間は価値観や認識論なしに、物事に取り組んだり、解釈したりすることはできないのであり、大学から排除された宗教的関心は、「自己啓発」というカルトを生み出しているとする。また、ポストモダンニズムは、神学のような「合意」を大学において形成することの不可能性を論じるが、実は、細分化された学問においては、それぞれの領域に、確固とした固有の「合意」が存在しているとしている。

6. まとめ

以上のことから、ニューマンの『大学論』は、カトリックの関係者に向けて語られたにも関わらず、極めて柔軟性に富み、現代の大学教育を考えるための、新しい視点を提供していると言える。その背景として、ニューマンが個人的な洞察力に恵まれていたことは確かであるが、キンボールの歴史的議論や吉満のカトリシズム論からも明らかなように、ニューマンが、中世におけるリベラルアーツの伝統やカトリシズム、中庸を旨とするイギリス紳士の伝統に徹底して忠実であったがために、近代主義の欠陥を冷静に見つめることができたという逆説を指摘することができる。

そこで、今日、必要なことは、ロバーツのように、ニューマンの時代と現代との社会情勢の違いを指摘して、ニューマンの議論はすでに妥当性を失っているとするのではなく、彼の理念を現代の状況に読み替えることであろう。ニューマン以後、高等教育機会の拡大、大学における研究活動・職業教育の進展、多文化主義・相対主義の浸透が著しいことを踏まえて、ここでは、ニューマンの持つ今日的意義を三つ指摘したい。まず、大学教育のあり方について、確かに、ほぼ一対一に近いチュートリアル制度やカレッジ制度は贅沢な教育環境であり、すべての大学生が享受できるものではない。また、大衆化・商業化した高等教育において、職業教育を否定することもできないであろう。しかしながら、教育活動は、ただ単に一方的な知識の伝授ではなく、教員と学生との双方向の営みであるという教授観、学習活動は情意や道徳観にも関連したものであるという統合的な学習観

は、エリート学生以上に教育支援を必要とする「大衆化した」今日の学生により当てはまるものである。

次に、研究至上主義に対する批判について、研究活動の高度化が専門領域を限定し、研究者の視野を狭くしているというニューマンの指摘は、今日、より顕著になっている。しかしながら、研究活動は、細分化なしに進展しないことも確かであり、ニューマンも、大学における研究活動自体を否定している訳ではない。問題となるのは、研究活動と同様な姿勢が教育活動にも延長されることであろう。すなわち、今日でも妥当性を持つことは、学士課程教育段階における教育目標を、早期からの特化した研究者養成ではなく、人格形成への配慮を伴う哲学的思考の育成やリベラルアーツの理念の実現とし、そのためのカリキュラムを準備することである。

そして、この目的を達成するためには、カリキュラムの提供だけではなく、実際に、リベラルアーツの理念を体現した教員の存在、彼らと学生たちとの人格的交流が必須である。この点において、ニューマンが大学の風土や環境、伝統を強調していることは、注目される。現在のオックスフォード大学においても、細分化された研究活動はデパートメントで行われ、共同生活や文化活動はカレッジを中心にするという区別が行われており、チューターたちは、研究者であると同時に学生たちのロール・モデルでもある。これは、大学が紳士の伝統を組織的に継承しようとする事例であろう。

最後に、探究心や批判精神を推奨する近代の大学は、知性の開発や研究活動の推進に比較して、人生観や宗教観など人格形成に関わる部分において、文化の継承を行っておらず、学生を精神的には放置しているという事実があげられる。この問題は、今日、より深刻になっており、かつてのヨーロッパや日本の大学が主張していたように、人格形成は中等教育段階までで完成すべきであるという原則論だけでは対応できないのが実情である。

そこで、大学における宗教や神学の役割が重要になるのであるが、ニューマンの述べるように、宗教の理念を徹底することによって、寛容性や多様性を実現するという主張は、日本においてはもちろん、キリスト教的基盤を持っていた欧米の大学においても困難になりつつある。そのため、マースデンが述べるように、むしろ多元主義の一環として、科学的・実証主義的思考と宗教的思考の特性・限界を理解することと、せめて大学が宗教的な議論を行う余地を認めることが必要であろう。この点に関して、ニューマンの『大学論』自体が、カトリシズムの視点によって、近代主義を克服するという貴重な事例を提供していると思われる。

【注】

- 1) この点は、ニューマンの宗教的背景に全く触れずに、『大学論』のみを論ずる猪木（2009）や神谷（2006）の態度に顕著であり、日本におけるキリスト教理解の欠如を示すものである。また、イェール大学版『大学論』（1996）に寄せられた五つの論考においても、マースデンを除いて、護教的な立場が取られていないことは、アメリカ社会における世俗化の進展を示すものである。これらの論考に比較して、戦前期に、カトリシズムの観点からニューマンを論じた吉満（1933）の論考は、よりニューマンの本意に即した議論を展開している。

【参考文献】

- 猪木武徳 (2009) 『大学の反省』 NTT 出版。
- ヴィヴィアン・H・H・グリーン (安原義仁・成定薫訳) (1994) 『イギリスの大学 - その歴史と生態』 法政大学出版局。
- 神谷高保 (2006) 「ニューマンの大学教育論」日本ニューマン協会編『時の流れを超えて J. H. ニューマンを学ぶ』教友社。
- 長倉禮子 (2005) 「ニューマンの大学論をめぐって」岡村祥子・川中なほ子編『J. H. ニューマンの現代性を探る』南窓社, 128-136頁。
- 吉満義彦 (1933) 「ニューマンの大学論と現代の哲学-ニューマン記念講演のために-」垣花秀武編『吉満義彦全集』第4巻, 講談社。
- Kimball, B. A. (1995). *Orators & Philosophers: A History of the Idea of Liberal Education*, Expanded edition. New York: The College Board.
- Marsden, G. M. (1994). *The soul of the American University: From Protestant Establishment to Established Nonbelief*. New York & Oxford: Oxford University Press.
- Marsden, G. M. (1996). Theology and the University: Newman's Idea and Current Realities. In J.H. Newman (Ed.), *The Idea of a University* (pp.302-317). New Haven & London: Yale University Press.
- Newman, J. H. (1964). *Realizations: Newman's Own Selection of His Sermons*. Foreword by Muriel Spark. London: Darton, Longman and Todd.
- Newman, J. H. (1982). *The Idea of a University*. Notre Dame: University of Notre Dame Press.
- Roberts, J. M. (1990). The Idea of a University revisited. In I. Ker & A. G. Hill (Eds.), *Newman after a Hundred Years* (pp.193-222). Oxford: Clarendon Press.
- Rothblatt, S. (1997). *The Modern University and Its Discontents: The Fate of Newman's Legacies in Britain and America*. Cambridge: Cambridge University Press.

On John Henry Newman's Ideas of a University

Keiichiro YOSHINAGA *

Japanese universities have been struggling to maintain a balance between research and teaching. Although it is now self-evident that scholars should do research, for some it is not easy to justify teaching except as a necessary evil for the sake of doing research. In this regard, it is worth examining the classics of university ideals in western countries that have examined the traditional confrontation between the two. In this paper, the author analyses one of the classics in this field, John Henry Newman's *The Ideas of a University* (1873) and discusses his arguments about university teaching, liberal arts, gentlemen, and theology.

It is well-known that Oxford University and Cambridge University have a great tradition of colleges and tutorials. Unlike the German universities which transformed themselves into research institutions in the early nineteenth century, these British universities identified themselves as teaching institutions until the early twentieth century. It was in the middle of the nineteenth century when Newman wrote the book to defend classical education against the establishment of the University of London.

According to Newman, the university is essentially an educational institution. It exists neither for research nor for vocational education, because these activities tend to narrow the human mind. Neither is the university's function to foster geniuses. Its role is to educate ordinary people and so enhance the general intellectual tone of society. Newman takes an essentialist approach to education, and considers that commercial and academic interests will distort the original mission of the university, which is to produce sound citizens and leaders for the sake of welfare of society.

Therefore, Newman also rejects specialized academic concentration at undergraduate level, because it magnifies partial views and prevents students from grasping the whole. According to Newman, the whole lies in a broadly-based study of inter-related views. Newman rejects the modern approaches of learning and calls for a return to the ideals of the liberal arts in the middle ages, which emphasized, he asserts, leadership, virtue, and modesty, all of which were nurtured through mastery of classics and deference to authorities.

Newman also rejects academic specialization on the ground that character building is more important than academic discovery. He regards the training of gentlemen as the mission of university education. According to him, scientific pursuit is not compatible with the ideals of gentlemen, which demand composure, balance, and compassion.

No matter how beautiful and sophisticated are the ideals of gentlemen, Newman considers that they are secular and are insufficient for Christians. This is the reason why he claims that it is important for universities to have theology. He thinks that it is necessary for universities to integrate academic activities and

* Associate Professor, Center for Educational Development, Tokyo University of Agriculture and Technology

existentialist concerns under the same moral reasoning. For this purpose, Christian doctrines should be disseminated not for the sake of inhibiting scientific inquiries but for the sake of achieving them thoroughly.

Newman's concepts of learning, interactive teaching, connections between character building and learning, and self-discovery through learning have implications for today's university teaching. His criticism of excessive research also has relevance to the construction of the undergraduate curriculum. Furthermore, his emphasis on the moral interaction between tutors and students is also relevant, because university teaching is losing such a component, which leaves students morally isolated.

Newman's genius lay in his ability to identify defects of modernism by adhering to the traditions of liberal arts and Catholicism. His calls for a Christian hegemony in the university, however, sounds anachronistic because of the prevailing secularism and multiculturalism, but it is arguable that, as George M. Marsden claims, the universities at least need to have space for religion and virtues.